

新学制下、東京美術大学の最初の入学試験は昭和二十四年（一九四九年）中途に行われた。私は絵がまだままならなれないと思ひ、見送った。その

私の履歴書

司 憲 庵 久 栄
けん けん あん けん え

⑩

の力ボチャを描いてみるという。鉛筆淡彩で描いたが、力量を試されたようだ。

友達の家にも長くはいられず、本郷に下宿を探した。私が夏休みで広島に向かっている最中、下宿が火事で焼けてしまった。隣部屋の友人が右田武夫という男で、片づいたから帰る必要はないと電報が届いた。彼は先に私の布団を

そこで絵を描いていた。わびしいが、希望があった。道のない悲しき青春ではな

く、道を得た喜びにあふれた青春。どこに行くのでもスケッチブックと鉛筆、筆は離さない。「筆を折らない」と心に誓った。おかげで翌年、東京美術大学に入学できた。志望は最初から**図案科**だった。油絵や日本画、彫刻では

道を得た喜びの青春

広島の新奇な趣向試す

持ち出してくれたが、自分のものはすべて焼いてしまった。最近まで「新評」という雑誌の編集長をしていた。

彼は当時、役所に勤めていた。二人とも行くところがないので、彼が役所のどこかで掘って小庭を見つけ、「お前も隣のことで寝ていろ」と言われ居候した。絵の練習は欠かさないで、街頭の探検球

種のヒーロー感にひたることができた。

とはいえ、東京で学生、広島で家計を助けるための僧侶という二重生活は続いた。檀家の中には絵が描けるお坊さんと聞いて、白地を染めるのにどんな模様がいいかと相談



する者がいて、唐草模様の絵を描いたりした。

広島では市街地の区画整理が進められていて、私のお寺の敷地の半分がその対象に入

った。この際、無縁仏を整理するなど、新しいタイプのお寺にしたいと思つた。

国人の彫刻家イサム・ノグチが来日し、広島平和大橋などのデザインをしていた。私はノグチの作品は、失われた「日本の魂」をよくとらえた感じ

がして影響を受けた。無縁仏はさびしい場所にあつたので、にぎやかな所に出

して挿んでもらおうと考えた。爆風でやられたお墓の石を集め、その上に小さく砕いた黒曜石をセメントで練って上塗りした。父のお墓もオブジェ風にし、合掌して東から光が入るようにした。

そつしたら教区の人から「私がお寺を出た後、お寺を明るくしたと市から表彰を受けたと聞いた。新奇な試みも、芸術家の自己表現というよりは、焼けた広島を新しくしたいという思いが先にあつた。」